

「一つの霊によって堅く立ち」

イザヤ書
ピリピ人への手紙

第45章20～21節
第1章27節～30節

説教 岡村 恒牧師

使徒パウロは、一人一人の顔を思い浮かべるように愛情を込めて、ピリピの教会の人々に語ります。「あなたがたはキリストの福音にふさわしく生活しなさい。」(27節)キリストの福音、キリストの救いの約束を聞いた信仰者として、神によって置かれた場所で、どのように歩いていけば良いのかを長い一文で記します。

このように「あなたがた」と語りかける前に、27節の前の部分で、パウロは自分の思いを吐露しました。こんな苦しい場所で、迫害を受けながら、何度も死にそうになりながら生きていくよりは、神の元で眠りに就いた方がはるかに良いが、しかし、神の許しがある限りはなお生きながらえて歩いていく、と率直に「わたし」がどういうふうに出て来て、今どのように歩いているかを描きました。だから、あなたがたもわたしと一緒に歩いて歩きたいと励ますように語るのです。

今日は、大阪教会の創立記念・帰天者記念の礼拝です。1927年以降記録されている帰天者486名の名簿と、そのうちの多くの方々の写真の前に広げてあります。これは、信仰を抱いて死の眠りに就いた人々を思い起こして、終わりの日の再会の約束の確かさを確認するためです。

よみがえられた主イエス・キリストは、パウロを教会の迫害者から伝道者へと創り変えて下さいましたが、それはパウロにとって多くの苦しみを負うことでもありました。パウロは、もう命を召されて神の元で休みたいと願いながらも、なお神に与えられた時間となすべき務めがある限り、精一杯神を証し、誉め讃えて歩いていく決心をします。

私たちはここに並べられた写真を見るだけで、何十人もパウロが、私たちの前を歩いたことを知ります。あの兄弟あの姉妹も、それぞれに与えられた場所で、それぞれの重荷を負い、託された務めを担いながら、神の守りと導きの中で精一杯歩き抜きました。

私たちは、心で信じようありたいと願いそのことを口にしながら、本来向かうべき方向に向かうことが出来ず、すぐに神に背中を向けて神から遠ざかってしまいます。聖書が語る罪とは、悪い行いのことではなくて、それを引き起こす向かうべき方向に行かない「的外れ」な生き方です。どんなに必死に歩んでも、神を人生の主

として歩む以外の歩み方は罪の生活なのです。

パウロは復活されたイエス・キリストによって、キリストを救い主として信じる者を捕まえて殺そうとした迫害者から、キリストを救い主として信じるだけでなく、このことを人々に述べ伝える伝道者になりました。罪の身が方向転換して、神に向かって歩き出します。これを本当の回心と呼び、キリストの福音にかなう生き方をパウロ自身が示します。

しかしそれは、いつでも簡単に道からこぼれ落ちるような旅です。共に一緒に信仰の道を歩こうと聖書が語る時、しばしば軍隊の行列になぞらえて描かれます。兵士達が戦いの最中に隊列を組んで、こぼれる人を拾い、遅れる人を引っ張りながら、全体を整えられて歩いていきます。このように信仰生活は、個人の内側の問題やたった一人で険しい道をさまよって歩くような歩みではなく、共同で一つの目的に向かっていく歩みなのです。

「一つの霊によって堅く立ち」(27節)、すなわちイエス・キリストの霊によって土台を据えられて、しっかりと立っているためには、教会全体が整えられることが必要です。

洗礼を受け、キリストにつながる者とされて生き始めると、誰もが信仰の戦いを経験します。ピリピの教会の人々も、迫害の戦いの中でこの手紙を受け取りました。私達は神を信じる信仰と共に、苦しむこと、重荷を負うことを与えられます。それは、信仰者が迫害のなかでただ悩み苦しむということではなく、これまで負って来た罪と死の重荷を全部下ろして、イエスキリストが与えて下さる、軽く負い易い喜びの重荷を負って歩けるということです。

私たちは、イエス・キリストが与えて下さる永遠の命と、神が与えて下さるなすべき務め、キリストの重荷を受け取って、この地上の旅と一緒に隊列を整えながら、一つの霊に結び合わされて歩み続けます。誰でも神の約束を信じ、イエス・キリストを救い主と信じて、洗礼によって新しい命を生きるなら、その人はこの隊列の一員です。そしてこの信仰の旅が終わりを迎える時、私達は「私の愛する子よ。」と神に呼ばれて、先に召された人々と再会し、共に天の国の食卓に迎え入れられるのです。

(記 説教要約奉仕者)